

年間第30主日

福音朗読 ルカ 18・9-14

2022.10.23

カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

[入祭の挨拶]

皆さん、わたしたちは感謝の祭儀を祝うために集まりました。今日は年間第30主日ですが、このミサの間に洗礼式が行われます。この子どもたちは教会の信仰の中で洗礼を受けます。わたしたちは喜んで迎え、信仰を新たに祈りましょう。

そんなわけで、今日の典礼の色は、主日は緑ですけれども、洗礼式のために白になっております。

[説教]

今日、幼児洗礼式がありますけれども、わたしたちが洗礼を通して頂く信仰の恵みとは何でありましょうか。

わたしたちの人生の中には必ず「ああ、自分ってダメだなあ」って自分がかっかりする、そういう瞬間がやってくる。それは若い時の挫折のときかもしれないし、高齢になってからかもしれないですけどね。でも、そのときに、今日のたとえ話の徴税人が「主よ、罪人のわたしを憐れんでください」って神様に向かって言っていました。だから、「自分ってダメだなあ」っていろんなことで思う。そのときに、でも神様に向かって「わたしを憐れんでください」と言うことができるというのを知ってる人は、実は自分の目には自分が今ダメな者として映っている、でもそれだけが現実ではないんだ、神様の自分とは違う物の見方、つまりは神様はわたしたちを憐れみに値する大切なものとして見てくださっているっていう、自分のものの見方ではない広いいろんな角度からもう一回現実を見直すことができるっていうことを前提にしています。だからこそ、神様に憐れみを求めることができる。

そういう意味で、信仰を持つ人っていうのは、自分のものの見方だけではなくて、本当は神様と共にもう一回現実を見直すから、広い視野を持つはずです。それはまた逆に、今日のファリサイ派みたいに、自分のことを「いいな」、「うまくいってるん

じゃないか？」と思うときにも、「ほんとにそうかな？」ってまた違う角度からもう一回反省する、そういう促しでもあります。

だから、本当は信仰を持つということは、広い視野を持つということのはずなんですけども、世の中ではどうして信仰を持っている人っていうのはなんか狭い考え方の中に閉じこもっている人のように思われているのでしょうか。

それはやっぱり、自分のものの見方に固執する一つの道具として、信仰というものを使う、間違った理解だったりアプローチがあるのだと思います。だから、わたしたちは絶えず、ほんとの意味での教会が伝えてきた、あるいは神様からいただく恵みとしての信仰っていかなるものかを問い直す必要があります。

今日、子どもたちが教会の信仰の中で洗礼を受けます。でも、そういう本当の意味での広い視野、そして深い信仰というものは、たとえご両親が聖家族的な素晴らしい人たちだったとしても、親だけでは無理です。だから、今日の洗礼式の大きな意味は、教会の共同体の中で、そして広い経験の中で、わたしたち人間の限界で完全にということは無いかもしれないけど、でもいろんな形で信仰を通して与えられる神様のものの見方、恵みに出会っていく、助け合う、その中に赤ちゃんがいるんだということ、今日ここにわたしたちだけじゃなくてカトリック教会の信仰を持つ者全員で確認するということだと思います。

今日は、はからずも世界宣教の日にあたっております。宣教っていうと全然知らない人を教会に招くっていうことだけのように思われがちですけども、でも、そういう意味では、次の世代にこの大切なことを伝えていくっていう幼児洗礼も宣教だし、そして自分自身をもっとイエス様が伝えようとしていることはなんなのかっていうのを理解しようとするっていうのが、自分に対しての宣教もあります。そして、もちろん、神様を知らない人に伝えていくっていうこともあります。いろんなレベルでの宣教があります。

そして今日、その一つの側面である、次の世代に信仰を伝えるっていうことの出発点である幼児洗礼式を行うことができるっていうのは、ほんとにこの高円寺教会にとって恵みだと思います。これは決して当たり前のこととはわたしたちは思うべきではないんです。この日本において、東京の高円寺だから幼児洗礼がしょっちゅうあるかもしれないけど、「幼児洗礼式なんて何十年もこの教会で見たことないわ」っていうような教会がこの関東地方にだっていくらでもあります。その中でわたしたちがこの赤ちゃんを迎えてできるっていうことは本当に恵みであり、使命としてもう一回考え直しながら、喜びのうちにこの洗礼式をしたいと思います。